

食で被災地を笑顔に ● 岩手県立花巻農業高校食農科学科



サンマをばはじめとし、同校で開発した加工品は、現在、岩手県が考案・作成している「適量バランス弁当箱」の献立の一部としても取り入れる予定です

岩手県立花巻農業高校は「被災地を笑顔に」をテーマに沿岸と同高校の特産物を使ったオリジナルメニューを研究し、商品の開発をしています。

同校の食農科学科魚研究班の3年生8名が開発したのは、おからとサンマのハンバーグ「サンマバーグ」と鮭の中骨が入った「カムカムクッキー」の2種。何度も試行錯誤を繰り返し、現在は市民などに試食アンケートをとり、更なる品質向上を目指しています。

同研究班の照井那海さん(17)は「子どもからお年寄りまで誰でも食べられるものを作りたい。栄養素やカロリーも細かく分析した。食で人を笑顔にしたい」と話しました。

泣いて笑って名勝負 ● 全国泣き相撲大会



同大会は、子どもの健やかな成長を願う行事。境内には元気な泣き声が響き渡ります。勝敗ではなく名勝負が見もの。応援する家族の温かい表情が印象的です

第26回全国泣き相撲大会(毘沙門まつり実行委員会主催)が5月3日から3日間、花巻市東和町の三熊野神社毘沙門堂で行われました。

全国各地から集まった豆力士は910人。泣いたら負けというルールのもと次々と繰り広げられる名勝負に会場は大いに盛り上がりました。

姉と共に申し込み、長野県から参加した矢島悠さん(26)の長男新良太くん(8か月)は、いとこ同士での対決となり、結果はお互い笑顔のままで引き分け。悠さんは「元気に優しく逞しく育ってほしい。一緒に出場した姉の子と、今日のようにずっと仲良く笑っていてくれたら嬉しい」と語りました。

雪解けと共に芽吹き ● りんどう栽培講習会

J Aは「りんどう栽培講習会」並びに「プラグ定植講習会」を5月9、10日の2日間、雪解けがようやく進んだ西和賀町内6箇所の圃場で開きました。

講習会には、西和賀花卉生産組合の10支部の農家らが集まり、J Aや西和賀農業振興センターの職員から、生育経過や難防除害虫の対策について説明を受けました。

今年にはトガリメイガが全域で発生確認されており、注意が必要で5月下旬には薬剤にて防除するように呼び掛けられました。

今年度は出荷量650万本、販売金額2億7600万円を実績目標としています。



今年は記録的な豪雪の影響が心配されましたが、圃場は昨年とほぼ同時期に消雪し、順調に発芽しています

歴史絵巻さながらの姿で町を練り歩く ● 遠野さくらまつり「入部行列」



治安維持の為に遠野移封を命じられた八戸南部氏22代直義公が、寛永4年、旧暦3月に八戸から50里の道のりを経て遠野にお国入りした当時の情景を再現したものです

遠野さくらまつりのメイン行事である「南部氏遠野入部行列」が5月3日、遠野市で行われました。

遠野太神楽を先頭に同市中央通りの蔵の道ひろばを出発。直義公は本田敏秋遠野市長が大馬に騎乗し務めました。その前後には槍や弓などを担いだ市民や同市と交流のある他県民ら約230人による家臣が隊列。威勢のいい掛け声とともに太鼓や笛の音が鳴り響く中、奥ゆかしい蔵の道を練り歩く大行列に観衆は魅了されました。

本田市長は「沢山の方々と共に参加し、観に来てくれた。地域と地域の繋がりが人と人との絆となる。みんなで盛り上げよう」とあいさつしました。

生誕130年の節目を迎え光太郎ファン700人集結 ● 第56回高村祭



地元高校生の音頭で、参加者全員で光太郎の詩を朗読。光太郎は、高村山荘で約7年間農耕自炊をしながら過ごし、住民から尊敬され慕われていました

花巻市ゆかりの詩人で彫刻家の高村光太郎を顕彰する「高村祭」が5月15日、同市太田の高村山荘詩碑前広場で開かれました。

光太郎の教えを学ぶ子どもや県内の学生が朗読や合唱、楽器の演奏などを披露。県内外から詰めかけた約700人のファンは、光太郎にちなんだ催し物に聞き入り、花巻での功績や足跡を振り返りながら遺徳を偲びました。

光太郎の言葉が刻まれた精神歌を歌った花巻市立西南中学校の高橋明里さんは「教室に飾られている光太郎先生の言葉は心の励み。沢山の方々が高村祭を迎えられて嬉しい」と微笑みしました。

今年度の農家受け入れ始まる ● はなまきグリーン・ツーリズム推進協議会



同協議会の農家民泊の受け入れは13年目。今年度は東京や大阪などの小・中学校、計11校、約1,506人の受け入れを予定しています

J Aや岩手県、花巻市などが組織するはなまきグリーン・ツーリズム推進協議会(会長・J A高橋利光生活福祉部長)は今年度の活動を開始し、5月9日には北海道白老町の白翔中学校を受け入れました。

修学旅行の一部として3年生の生徒と教師ら約65人が訪れ、花巻市太田の伊藤仁さんの10aの水田で田植え作業に挑戦しました。

慣れない水田に足を取られながらも約2時間ほどで作業を終了させました。その後、総合営農指導拠点センターで、市内16農家と対面。各々の農家宅での民泊体験を通じてその暮らしに触れました。